

平成 19 年度 1 次隊、植林でニジェールに派遣中の北原遥です。
今回以下に任国での様子を紹介します。

ニジェール共和国

- 人口：1440 万人
- 面積：126 万 7000k m² 日本の約 3.3 倍
- 首都：ニアメ
- 主要民族：ハウサ族 50%、ザルマ族、トアレグ族、プール族、ソングアイ族
- 主要言語：フランス語、ハウサ語、ザルマ語
- 主産業：農業、畜産、鉱業
- 宗教：主にイスラム教
- 気候：6 月から 9 月の雨季、10 月から 5 月の乾季

12, 1, 2 月は風が強いため砂が舞い、その砂で太陽が隠れることもある。この時期はニジェール人もジャンパーやコートを着込んで「寒い、寒い」と言っている。子供は毛糸の服に頭巾をかぶっていて、日本の冬のように。

4, 5 月が特に暑く、日差しも強い。家の中でも 40 度近く、外の日向は 50 度にもなる。しかし乾燥しているため、日陰に入り、風が通ればそこまで暑さは感じない。

•任地

任地は首都から東に 600 キロ、バスで約 10 時間のところにあるギダンルンジ。現地語はハウサ語。町外れに行くと、大地が広がり、地平線が見渡せる。ここに来て、空と大地の吸い込まれてしまいそうな、大きな大きな広がりを感じ

ている。

こぢんまりとした町なので、町全体が知り合いのような雰囲気がある。人々は穏やかで、町を歩いているとあちこちから挨拶が飛んでくる。こちらの挨拶は長く、

Ina kwana? (おはよう)

Kina lahiya? (元気かい?)

Kin tashi lahiya? (目覚めはどうだい?)

Ina gida? (家はどうか?)

Ina aiki? (仕事はどうか?)

Ina yara? (子供は元気かい?)

Ina zahi? (暑さはどうか?)

Ina gajiya? (疲れはどうか?) などなど。しかしこの長い挨拶のおかげで顔見知りも増える。そして何よりも、いつも笑顔で挨拶をし、挨拶を返してくれるニジェールの人々に、ホッと心が和む。そんな彼らを見習いたい。



写真 1. ギダンルンジの風景



写真 2. 道を歩く羊の群れ



写真 3. 大地と朝日



写真 4. 大地と空



写真 5. 農作業をする人々



写真 6. 毎週日曜日の市場の様子

・生活

今(2008.7)ニジェールはちょうど雨季の時期。人々が待ち望んでいた雨が降り出し、人々は畑へと駆り出す。雨が降った翌日は皆畑へ行くため、町には人が少なくなる。村に行くと共に、いつも日陰でおしゃべりをしたり、家で家事をしたりしている人々も皆が畑へ行くので村に人がいない。この時期、挨拶のなかにも「畑はどうだい？ 植えはもう終わった？」という会話が入り、ここの人々は皆が農民なのだと思う。皆が大地に足をつけて暮らしている。朝早く 7 時前から牛車やロバ車に乗って、または歩いて畑へ行く。この時期は人々にとって、1 年の糧を得る大切な時期。

私は現在ギダンルンジの町の中で 1 軒屋を借りて、そこで警備員の家族と共に暮らしている。街中では道沿いに商店が立ち並び、大体なんでも揃う。毎週日曜日には町外れでおおきな市場が開かれ、布や家畜、日常用品、食べ物などを買う。この日は村々からも人が集まり、賑わう。

・活動

私の職場はギダンルンジ県環境局。ここではギダンルンジ県内の水源開発整備、土壌整備、植林、砂漠化防止、漁業、動物保護に関する行政を司っている。

現在の私の活動は、

・改良かまど

薪使用の削減、女性の労働の軽減(薪集め、調理時間の短縮など)を目的としたもの。従来使われている三つ石のものから熱効率のいい改良かまどの導入を啓発。村の女性グループに対して、改良かまどの利点を伝え、作り方のデモンストラーションを行っている。

・学校植林

ギダンルンジ内の各学校を回り、生垣林などの要望がある学校に植樹を提案。現在、測量、穴掘りを終え、植樹に向けての雨待ち状態。また毎年 8 月 3 日はニジェールの独立記念日で、植樹の日となっているため、その日に植樹を行う

予定の学校もある。

・住民苗畑

前任者が立ち上げた10ヶ村での住民苗畑の現状把握。また来季に向けての苗畑の準備。

村へ行くための道はコンクリートで固められた道はなく、道なき砂道。初めて行く村は道が分からず、とにかく教えてもらった、東西南北の方角へと進む。道に迷うことも多々あるが、しかしここでもいつもニジェール人の優しさに助けられる。道を尋ねると誰もが快く案内してくれ、立ち寄った村では「飲んで」と水を持ってきてくれる。目的とする村が分からず、立ち寄ったある村では、道案内をしてくれたおばさんに「ありがとう」と言うと、「お客が自分達のところに来てくれるのはとても嬉しいこと。だから私こそありがとうだよ。気をつけて帰ってきてね」と言ってくれた。ここの人々は人を受け入れるということがとても自然に出来てしまう人達だ。そんな人々に囲まれ、助けられて、私はここで生活しているのだといつも思われる。



写真7. ギダメルソンジ県環境局



写真8. 改良かまどを使う女性



写真9. 穴掘りをする人々



写真10. 植樹する子供

